

『或日の大石内蔵助』論*

- エゴイズムのことについて -

金熙照**
khj134@unitel.co.kr

<目次>

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1.はじめに | 5. 「放埒の生活」と他者の認識について |
| 2. 内蔵助の『満足の情』について | 6. 傍観者のエゴイズムのこと |
| 3. 内蔵助の不快について | 7. 人間本来のエゴイズムのこと |
| 4. 『背盟の徒』に対する罵倒について | 8. おわりに |

主題語: 復讐の挙 (behavior of the revenge)、背盟の徒 (treacherous people)、放埒の生活 (life of the debauchery)、エゴイズム (egoism)、云いようのない寂しさ (inexpressible desolation)

1.はじめに

芥川龍之介はしばしば人間の内面の奥深くまで、入り込んでその心理を巧みに描く作品をも書き上げる。たとえば、『羅生門』では平安時代を背景に、未熟で平凡な下人を通して、その下人が盗人になるまでの過程を彼の心理の変化を追って丹念に描いている。『鼻』では長鼻の禅智内供を通して、鼻に煩わされる内供の心理状態を具に描いており、内供をめぐる「池の尾」の人々の傍観者の利己主義という人間の微妙な心理を描写している。また、『戯作三昧』には、『南総里見八犬伝』の著者曲亭馬琴をもって、彼が「戯作三昧の境」に至るまでの心理状態が繊細に描かれている。『トロッコ』にも少年の良平が、「軽便鉄道敷設の工事場」の土工たちと一緒にトロッコに乗りたいという子供の無邪気な心理が巧みに描かれており、日暮に土工たちと別れて一人で帰宅する良平の心細い心理状態がリアルに描かれている。このように、歴史上の人物や古典から材料を借りて様々な作品で登場人物の奥深い内面を描いて見せた芥川は、江戸幕府時代の赤穂事件を取材し、事件の中心人物で

* 본 논문은 2015년도 조선대학교 학술연구비의 지원을 받아 연구되었음.

** 朝鮮大學校 日本學科 教授

あった大石内蔵助の内面の世界を読者に披露する。周知のように、大石内蔵助は浅野長矩の家老として、赤穂の武士たちを率いて主君浅野長矩の仇吉良義央の屋敷を深夜に攻め込んで吉良の頸をとり、主君の仇討ちを成し遂げた人物である。そして大石内蔵助のその当時の活躍ぶりは、浄瑠璃、歌舞伎、狂言、仮名手本などを通して人々によく知られている。しかし、内蔵助の本懐を遂げてから切腹するに至るまでの内面世界は分かりようがない。大石内蔵助に興味を抱いていた芥川はそれに目をつけたのである¹⁾。なお、芥川は大石内蔵助の当時の心境に迫るために、既に三好行雄が指摘したように、堀内伝右衛門の「堀内伝右衛門覚え書」や福本日南の「元祿快挙録」、「赤城土話」などを参考にして執筆に取り掛かったのである²⁾。また、本作品に関する従来の評価として、森田草平は、

周到な用意の下に、此上引っ張れば大石が大石でなくなるところまで持って行かれてゐる。此処まで持つて行くことは滅多に他の者には出来ない³⁾。(『或日の大石内蔵之助』、p.38)

と述べており、佐藤泰正は森田の評価を挙げながら、

発表より世評も高かったもので<材料を取扱う上に非常な工夫が凝ら>され<新しい解釈><発見>もある。(中略)、これは余人の追随を許さぬものである⁴⁾。
(『或日の大石内蔵之助』、p.90)

と高く評価している。なお、吉村綱は次のように述べている。

『或日の大石内蔵助』は、ふと自己を見返った主人公とともに、芥川が、独善的な生存の姿勢を凝視した作品であると言える。(中略、『或日の大石内蔵助』において、内蔵助(ママ)は、この見返った自分の状況を、冴え返る心の底に映し出しながら、「云ひやうのない寂しさ」を味わっている。そして、その「云ひやうのない寂しさ」は、芥川の世界観の中に吹き込んで来たものであったのである⁵⁾。
(『芥川文芸の世界』、p.65)

-
- 1) 中村友(2000)「或日の大石内蔵之助」『芥川竜之介全作品事典』勉誠出版に、芥川が大石内蔵助に興味を持つようになったことについては、江口渙から赤穂義士のことを聞いた芥川がそれに興味を持って執筆することになったという指摘がある。p.38
 - 2) 典拠について三好行雄(1967)は「堀内伝右衛門覚え書」と「元祿快挙録」とを挙げながら、<『赤穂義人纂書』第一巻所収の「赤城土話」などの諸文献も参看の機会があったようである。「脱した岡林之助の詰腹は、「赤城土話」のみに見えるエピソードである>と指摘している。p.259
 - 3) 前出中村友(2000)に拠る。p.38
 - 4) 佐藤泰正(1978)に拠る。p.90

本稿では、テキストを読み直し、大石内蔵助の心境を分析し、彼と世間との接点を考察して、人間のエゴイズムに迫ってみたいと考える。

2. 内蔵助の「満足の情」について

作品は大石内蔵助が「復讐の拳」を成し遂げた後、幕府のお仕置きを受け江戸の細川家に預けられて、長閑かな一時を過ごしているところから始まっている。

立てきた障子にはうらかな日の光がさして、嵯峨たる老木の梅の影が何間かの明みを、右の端から左の端まで画の如く鮮に領している。元浅野内匠頭家來、当時細川家に御預り中の大石内蔵之助良雄は、その障子を後にして、端然と膝を重ねた俣、さっきから書見に余念がない。書物は恐らく、細川家の家臣の一人が貸してくれた三国誌の中の一冊でろう。

(『或日の大石内蔵之助』、p.7)

内蔵助は主君・浅野長矩の刃傷事件から二年の歳月を、専ら主君の仇討ちのため様々な苦況を克服し、ついに本懐を遂げて久しぶりに長閑かな一時を楽しんでいる。彼は性急な浪士たちを制し、それに吉良家から放たれた間者たちの目をくらすため、放埒の生活を装うことは並大抵の苦衷ではなかったのである。なお、彼自身の放埒三昧の生活に騙された赤穂浪士たちの怒りを沈めるのは一入辛かったことなのであった。こういう苦境を乗り切ってすべての事が自分の思惑通りに捗っていたのである。それゆえ彼の心からは、吉良の首を切り取って主君の眠っている泉岳寺へ引き上げた際に「あらたのし思ひははるる身はすつる、うきよの月にかかる雲なし」と吟じたような「安らかな満足の情」が生じてくるのであろう。こういう内蔵助の「満足の情」は唯亡君の仇討ちに成功したということからのものではない。彼は自分の満足の心境を次のように述懐している。

もうすべては行く処へ行きついた。それも単に復讐の拳が成就したというばかりではない。すべてが、彼の道德上の要求と、殆ど完全に一致するような形式で成就した。彼は事業を完成した満足を味ったばかりでなく、道德を体現した満足をも、同時に味わう事が出来たのである。

5) 吉村穉(1974)「大石内蔵之助」-初期世界の変質とその展開性『芥川文芸の世界』明治書院に拠る。p.65

6) テキストの引用は『芥川龍之介全集』2、筑摩書房、2011年に據る。

しかも、その満足は、復讐の目的から考えても、手段から考えても、良心の疚しさに曇らされる所は少しもない。彼として、これ以上の満足があり得ようか。

(『或日の大石内蔵之助』、pp.9-10)

内蔵助の述懐のうち「満足」という言葉は四回にわたって使われている。彼の満足は何を意味するのであろうか。彼が亡君の仇討ちの事業を満足に思ったのは、それが無事に達成されたということだけではなく、武士としての潔いマナー、武士としての守るべき義理を尽くしたためであった。言わば、自分が本懐を遂げたことは、個人的な遺恨を持ってしたことではなく、武士としての道徳的な義理を尽くすためだったからである。だからこそ、彼は少しの「良心の疚しさ」をも感じることなく、思う存分に満足感を味わっているのである。この際の内蔵助の満足の心境は、富森助右衛門がお正月に詠じた「今日も春恥しからぬ寝武士かな」という句にもよく表れているのである。

3. 内蔵助の不快について

ところが、内蔵助の満足の心境はさほど長く持たない。座敷で寛いでいるところへ早水藤左衛門が入って来たからである。藤左衛門は主君・浅野長矩の刃傷事件を早駕籠で、江戸から赤穂城までの約六百キロの道程を四日半で、一番初めに知らせた馬廻役である⁷⁾。彼は「下の間」から聞いた話を内蔵助に得意になって聞かせる。それは、自分たちの成し遂げた仇討ちが、江戸の人々に影響を与えた結果、仇討ちを真似て振る舞っているということであり、そういうことが流行っているという話である。たとえば、隣同士の米屋の亭主と紺屋の職人が銭湯で些細なことで言い争うことになって、米屋の亭主が紺屋の職人に桶で殴られたということである。殴られた米屋の丁稚は、赤穂浪士の仇討ちを真似て、紺屋の職人に亭主の仕返しをするということである。

職人の方は、大怪我をしたようです。それでも、近所の評判は、その丁稚の方が好いと云うのだから、不思議でしょう。そのほかまだその通町三丁目にも一つ、新麴町の二丁目にも一つ、それから、もう一つはどこでしたかな。とにかく、諸方にあるそうです。それが皆、我々の真

7) 菊地明『忠臣蔵』(2002)に<江戸と赤穂城の間は150里(約600km)、通常なら役15日間の行程である。これを彼らは不眠不休のまま、四日半という驚異的なスピードで駆け抜け>という記述がある。p.66

似だそうだから、可笑的じゃありませんか。 (『或日の大石内蔵之助』、p.13)

つまり、私的でした、些細な暴力事件で被害を受けた者が、赤穂浪士の仇討ちを真似て返報返しをするということである。藤左衛門は江戸でそういう真似事が流行るということにプライドを持ち、誇らしく思っている。藤左衛門の誇らしく思うのはほかでもない。江戸の人々が真似事をするということは、内蔵助一党の赤穂浪士たちが江戸の人々のアイドルになっているからであろう。しかも、江戸の人たちの反応は先に述べた「丁稚の方が好いと云う」評判なので、藤左衛門の誇りは無理でもない。だからこそ「復讐の拳が江戸の人心に与えた影響を耳にするのは、どんな些事にしても、快いに」思うのである。ところが、藤左衛門の話は内蔵助の心境に微妙な変化を与えることになる。それは久しぶりに味わっていた彼の「満足之情」を曇らせたのである。内蔵助のその心境の変化は次のようにある。

藤左衛門の話は、彼の心の満足に、かすかながら妙な曇りを落させた。と云っても、勿論彼が、彼のした行為のあらゆる結果に、責任を持つ気でいた訳ではない。彼等が復讐の拳を果して以来、江戸中に仇討ちが流行した所で、それはもとより彼の良心と風馬牛なのが当然である。しかし、それにも関わらず、彼の心からは、今までの春の温もりが、幾分か減却したような感じがあった。 (『或日の大石内蔵之助』、p.13)

つまり、「江戸中に仇討ちが流行した」といっても、内蔵助とは関係のないことである。したがって、彼が責任を負う必要もない。先に述べたように「復讐の拳」は「すべてが、彼の道徳上の要求と、殆ど完全に一致するような形式で成就」したのである。それゆえ彼の「良心の疚しさに曇らされる所は少しもな」かったのである。では、藤左衛門と忠左衛門などの浪士たちは、「江戸中に仇討ちが流行した」ことを得意気に思っていたのに対して、内蔵助だけは どうして「不愉快」になるのであろうか。彼の「不愉快」について、

ふだんの彼なら、藤左衛門や忠左衛門と共に、笑ってすませてる筈のこの事実が、その時に満足しきった彼の心には、ふと不快な種を蒔く事になった。これは恐らく、彼の満足が、暗々の裡に論理と背馳して、彼の行為とその結果のすべてとを肯定する程、虫の好い性質を帯びていたからであろう。勿論当時の彼の心には、こう云う解剖的な考えは、少しもはいつて来なかった。彼はただ、春風の底に一脈の氷冷の気を感じて、何となく不愉快になっただけである。 (『或日の大石内蔵之助』、p.14)

とある。内蔵助の不快というのはほかでもない。江戸の町人たちに流行っている仇討ちじみた真似事は、内蔵助の仇討ちとは品格が違うからである。言い換えれば、町人たちの些細な返報返しは、内蔵助の「復習の拳」に託けて自分たちの恨みを晴らすことにすぎない。もっと立ち入って言えば、内蔵助は武士としての守るべき武士道を果たすため、亡君に仕えた家老としての礼儀を尽くすために正堂堂として「復習の拳」を行ったのである。そして、内蔵助の一族四十七人の敢行した「復習の拳」が江戸の人々に認められたからこそ、彼は満足したのである。それに対して、町人のそれは先に述べたような単なる返報返しに過ぎない。彼らは私的な暴力を「仇討ち」といった、うまい口実で正当化していたのである。つまり、内蔵助の「不愉快」は自分の神聖なる「復習の拳」を、町人たちの真似事により、汚されたことから起因している。言い換えれば、内蔵助は「復習の拳」の意味が歪曲され、江戸の町人たちの私的な恨みの晴らしの口実として変質してしまったことに「不愉快」を覚えているのである。

4. 「背盟の徒」に対する罵倒について

「復習の拳」の真似事に対する内蔵助の不快感は、忠左衛門や藤左衛門には知りようがない。彼等は内蔵助も自分たちと同様に思っているだろうと信じているのである。それで、藤左衛門は得意になって、江戸の町人百姓に流行っている「仇討ちの真似事」を内蔵助や忠左衛門に確認させようと、細川家の家來で、その日当直を務めていた伝右衛門をつれて来る。彼は細川家の御使番で浪士たちの世話役を担っていたが、内蔵助一族を温情を以って昔なじみのように当たったと云う⁸⁾。障子に入って来た伝左衛門も内蔵助の心境は知らず、藤左衛門の話に同調して云う。

人情と云うものは、実に妙なものでございます。御一同の忠義に感じると、町人百姓までそう云う真似がして見たくないのでございましょう。これで、どの位じだらくな上下の風俗が、改まるかわかりません。やれ浄瑠璃の、やれ歌舞伎のと、見たくもないものばかり流行っている時でございますから、丁度よろしゅうございます。(『或日の大石内蔵之助』、p.16)

8) 菊地明(2002)、前出書に堀内伝右衛門は<赤穂浪士たちの縁者との連絡にも奔走したと。さらに、浪士たちが切腹したあと、京都や大坂辺りの親類にその委細を伝え歩き、浪士たちに篤い誠意を尽くしてくれた>とある。p.209

しかし、伝左衛門の話は、内蔵助の心境を、さらに曇らせるばかりである。内蔵助は伝左衛門の話題を変えようとして「背盟の徒」について語り始めることになる。それでようやく彼の思惑通り雰囲気は一転して「真面目な調子」になる。ところが、内蔵助の話を知っている伝左衛門を始めとして、藤左衛門、忠左衛門などは興奮し、背盟した輩を非難して罵る。とくに真率で真面目な伝左衛門は自分の事のように興奮し、背盟の輩を斬り捨てようという勢いになって次のように気炎を吐く。

何に致せ、御一同のような忠臣と、一つ御藩に、さような輩が居ろうとは、考えられも致しません。さればこそ、武士はもとより、町人百姓まで、犬侍の祿盗人の悪口を申して居るようでございます(中略)、かような場合に立ち至って見れば、その汚名も受けずには居られますまい。まして、余人は猶更の事でございます。これは、仇討の真似事を致すほど、義に勇みやすい江戸の事と申し、且はかねがね御一同の御憤りもある事と申し、さような輩を斬ってすてるものが出ないとも、限りません。」伝右衛門は、他人事とは思われないような容子で、昂然とこう云い放った。この分では、誰よりも彼自身が、その斬り捨ての任に当り兼ねない勢いである。
(『或日の大石内蔵之助』、pp.18-19)

伝左衛門の気炎に座敷の中の皆は義憤を感じている。しかし、この度も内蔵助だけはつまらなそうな表情で黙っている。そして、彼は座敷の浪士たちの興奮から意外な事実気づくことになる。それは、背盟の輩を非難するうちに、「復習の拳」を成し遂げた自分たちの忠義はもっと高く評価されるということである。そういう事実はさらに彼の満足の心境を曇らせる。何故ならば、彼は、

実際彼等の変心を遺憾とも不快とも思っていた。が、彼はそれらの不忠の侍をも、憐みこそすれ、憎いとは思っていない。人情の向背も、世故の転変も、つぶさに味って来た彼の眼から見れば、彼等の変心の多くは自然すぎる程自然であった。もし真率と云う語が許されるとすれば、気の毒な位な真率であった(中略)、彼は彼等に対しても、終始寛容の態度を改めなかった。それを世間は、殺しても猶飽き足らないように、思っているらしい。何故我々を忠義の士とする為には、彼等を人畜生としなければならぬのであろう。我々と彼等との差は、存外大きなものではない。
(『或日の大石内蔵之助』、pp.19-20)

と、思っているからである。内蔵助は「背盟の徒」が江戸の人々に与えた影響が、また自分の思惑と反していることを伝左衛門の言葉から気付き、不快になるのである。彼の最初の

不快は自分たちの「復習の拳」を真似て、江戸で亂暴が流行するという事であった。それは武士として自分の名誉が汚されたことから、自分たちの神聖な道徳的行為が単なる亂暴に変質し、江戸で流行ったということからであった。これに対して、今度の不快は「背盟の徒」に対しての内蔵助自身と他者との考え方の違い、誤解から起こるものである。すなわち、「背盟の徒」の中には背盟をせざるをえなかった事情があつて、やむを得ず背盟をした者もあるだろうが、他者は委細かまわず「背盟の徒」を許せない者と処断してしまう。一方、内蔵助は「背盟の徒」を自然の成り行き、世の中の常として、「復習の拳」に参加した義士たちと、あまり差はないと思っている。つまり、「人情の向背」や「世故の轉變」はどうしてもない人情の常であるということである。だが、他者は「背盟の徒」をはっきりと「忠義の士」と「人畜生」とのけじめを付けてしまう。すなわち、彼等は自分ばかりが正しいという独善的なエゴイズムに満ちているのである。内蔵助は伝左衛門を始めとした他者の言葉にこの独善的なエゴイズムを気づき、不快感を覚えているのである。これはそのまま作者芥川に繋がる思想でもある。彼は本作品の一年後に発表した『袈裟と盛遠』(大正七年)や四年後の『藪の中』(大正十年)などで人間の独善的なエゴイズムを披歴していたのである。『袈裟と盛遠』で袈裟と盛遠は相思相愛の関係にありながらもそれに気づかず、徹底的に自分の独善的なエゴで相手を判断していたのである。盛遠は袈裟と肉体関係を結ぶが、その動機を袈裟の「虚栄心」乃至「反抗」と自分勝手に判断し、なお「欲望の為の欲望だ」という独善的なエゴをいっていた。一方、袈裟は欲望と寂しさのために、すなわち自分の独善的なエゴに満ちて、盛遠と関係したのである。なお、彼女は盛遠から夫殺しを提案された際には、夫の命はことともせず、盛遠の提案を勝手に自身に対する愛と思ひ込む独善に陥ったのである。芥川は袈裟と盛遠とに相手を顧みず、自分の独善に陥って動いている人間の姿を描いていたのである⁹⁾。なお、四年後の『藪の中』でも芥川は真砂を通して独善に満ちたエゴイズムを描写している。真砂は夫の武弘の前で多襄丸に手込めにされて、多襄丸から自分の妻になる気はないかと誘われる。口に竹の落葉を頬張らせられ、杉の根方に縛り付けられていた武弘は真砂に多襄丸の口車に乗らないようにと目配せをする。だが、真砂は武弘の目つきが自分を蔑んでいたと勝手に自己中心に判断する。さらに、彼女は武弘の悔しい心境は考えず、自分のことばかり思って「二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらい」「生き残った男につれ添いたい」¹⁰⁾とあって武弘を殺そうとする独善に走っていたのである。つ

9) 独善的なエゴイズムについては金熙照(2001)「袈裟と盛遠論」『日本学報第49輯、韓国日本学会ですでに詳しく述べていた。

10) 『藪の中』のテキスト引用は『芥川龍之介全集』、ちくま文庫2005年に拠る。なお、真砂のエゴイズムの

まり、袈裟と盛遠と真砂は相手の事情を汲んでやることなく、もっぱら自分だけが正しいという独善に陥っているのである。このような独善的なエゴイズムを芥川は「背盟の徒」に対する他者の罵倒を以って読者に披歴しているのである。

5. 「放埒の生活」と他者の認識について

伝左衛門は「背盟の徒」の話に内蔵助の表情が暗くなると、その雰囲気を変換しようと内蔵助の「放埒の生活」について述べる。

過日もさる物識りから承りましたが、唐土の何とやら申す侍は、炭を吞んで唾になってまでも、主人の仇をつけ狙ったそうでございますな。しかし、それは内蔵助殿のように、心にもない放埒をつくされるよりは、まだまだ苦しくない方ではございますまいか。

(『或日の大石内蔵之助』、p.20)

内蔵助は自分は仇討ちをする気がないことを見せて、吉良家を安心させるために「放埒」を装った時期があったが¹¹⁾、伝左衛門は内蔵助の「苦肉の計」としての遊廓での放蕩ぶりを唐土の侍に喩えて褒める。さらに、小野寺十内も伝左衛門の褒め言葉に相づちを打って内蔵助の作った「里げしき」や名高い「濫行」について話すことになる。が、内蔵助はその話に軽蔑されたような心持ちになり、最初の満足から不快感になり、それはさらに「不愉快」と「侮蔑されたような心もち」に変わり、もっと強い不快感にエスカレートする。なお、忘れかけていた過ぎ去った昔の放蕩ぶりが蘇るのである。

如何に彼は、この記憶の中に出没するあらゆる放埒の生活を、思い切って受容した事であろう。そして又、如何に彼は、その放埒の生活の中に、復讐の拳を全然忘却した駑蕩たる瞬間を、味わった事であろう。彼は己を欺いて、この事実を否定するには、余りに正直な人間であった。勿論この事実が不道德なものだなど云う事も、人間性に明かな彼にとって、夢想さえ

ことはすでに金熙照(2001)「藪の中論」『日本語文学第』10輯、韓国日本語文学会で述べた。

11) 菊地明前出書に拠れば、内蔵助がよく出入りした所は、伏見にある撞木町の笹屋という遊廓であったとあって、<笹屋長八方に内蔵助はたびたび登樓し、郭内の置屋から遊女を呼んで遊んだ。撞木町での馴染みの太夫は夕霧といったが、ほかに京都の島原や祇園にも遊び、内蔵助は「うき様」と呼ばれていた。>とある。p.124

出来ない所である。従って、彼の放埒のすべてを、彼の忠義を尽す手段として激賞されるのは、不快であると共に、うしろめたい。
(『或日の大石内蔵之助』、pp.22-23)

内蔵助のこの度の不快は、先の「復習の拳」に対する町人たちの真似事や、「背盟の徒」に対する他者の罵倒から感じたものよりも、もっと強い不快感を伴っている。なお、これに止まらずこの度は不快と共に自分自身に対する「うしろめた」さをも伴っていることに注意したい。彼が後ろめたく思うのは、自分の放蕩ぶりに対する他者の認識に起因している。他者は内蔵助の放蕩ぶりを仇討ちの為の「佯狂苦肉の計」として、彼を「沈勇」だと褒めている。ところが、内蔵助自身は必ずしもそうだとは思っていない。実は内蔵助は「放埒の生活」を味わったこともあったのであり、その放蕩ぶりの中で「復習の拳」を忘れたことさえもあったのである。内蔵助自身「その放埒の生活の中に、復讐の拳を全然忘却した駑蕩たる瞬間を、味わったことであろう」「あらゆる放埒の生活を、思い切って受容した事であろう」と、その当時の本音を吐いている。無論、放埒の生活は、カムフラージュとして吉良家の人々を安心させるため、あくまでも討ち入りの手段であったのは言うに及ばない。だが、内蔵助は討ち入りに事寄せて「駑蕩たる瞬間を、味わった事」をもあったと告白している。ところが、他者はそれを「忠義を尽くす手段」として褒めそやしているのである。これのために「余りに正直な人間で」あった彼は後ろめたく思うのであり、侮蔑されたような心境になるのである。それゆえ、彼は物事の本質をはっきり認識せず、誤解して勝手に賞賛する他者に反感を持つ。なお、内蔵助は他者のその誤解を予想しなかった自分の「愚」を嘆いているのである。

彼の復讐の拳も、彼の同志も、最後に又彼自身も、多分にこの儘、勝手な賞賛の声と共に、後代まで伝えられる事であろう。こういう不快な事実と向い合いながら、彼は火の気のうすくなった火鉢に手をかざすと、伝左衛門の眼をさけて、情無さそうにため息をした。

(『或日の大石内蔵之助』、p.23)

内蔵助が最初に味わったその満足感は、今になっては欠けらも無く消えている。唯残っているのは、「不快」と「誤解に対する反感」しか無い。では、内蔵助の最初に味わっていた満足感を今の不快感に至らしめたのは何であろうか。それは物事の本質を認識できず、尻馬に乗って勝手にあげつらう他者のためである。

6. 傍観者のエゴイズムのこと

先に述べたように、内蔵助は自分の「放埒の生活」に対しての他者の評判に不快と後ろめたさと侮蔑感を感じていた。すなわち、他者は内蔵助の真の心境は知らず「沈勇」とか「放埒のすべてを、彼の忠義を尽くす手段」と勝手に論ったのである。このような他者の態度は本作品の前後に発表した『鼻』(大正五年)の「池の尾の町の者」や『地獄変』(大正七年)の良秀をめぐる世間の評判にもよく表れている。『鼻』での内供が長鼻を「持て余した理由」は「鼻によって傷つけられた自尊心の為」であった。が、他者である「池の尾の町の者」は内供の真の心境は知らず勝手にあれこれと論う。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと云った。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思ったからである。中には又、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さえあった。しかし内供は、自分が僧であるために、いくぶんでもこの鼻にわずらわされることが少なくなったと思っていない。内供の自尊心は、妻帯というような結果的な事実には左右されるためには、あまりにデリケートにできていたのである¹²⁾。

(『鼻』、p.64)

「池の尾の町の者」は内供のデリケートな自尊心と苦悩は知らずに、ただ彼の長鼻だけを見て、勝手にあれこれと論うのである。さらに「池の尾の町の者」は鼻のために苦しんでいる内供の姿を楽しんでいるような態度さえ窺われる。これは内蔵助の場合に似ている。先に述べたように、内蔵助は武士としての自尊心を守るために「復讐の挙」を成し遂げたのである。だが、「江戸の人々」はそのような内蔵助の自尊心や苦悩は知らずに、ただ「復讐の挙」といった体裁ばかりに興味を抱き、なおも真似事さえ為出かしたのである。このようなパターンの他者は『地獄変』の良秀をめぐる世間の人々の評判も同様である。『地獄変』の良秀も娘のことで他者から何かとあげつらわれる。良秀は自分の最愛の一人娘を大殿地獄から救う為に、苦悩の末に娘を焼き殺すことを大殿に願い出たのである。ところが、他者である世間の人々は良秀の苦悩とは風馬牛の態度で、良秀を勝手に罵り、またいい気味になって小気味よく思う者さえいたのである。

それに就いては随分いろいろな批判を致すものも居ったようでございます(中略)それからあの

12) 『鼻』のテキストの引用は『芥川龍之介全集』1、ちくま文庫(2011)に拠る。

良秀が、目前で娘を焼き殺されながら、それでも屏風の画を描きたいと云うその木石のような心もちが、やはり何かとあげつらはれたようでございます。中にはあの男を罵って、画の為には親子の情愛も忘れてしまう、人面獣心の曲者だなど申すものもございました。あの横川の僧都様などは、こう云う考へに味方をなすった御一人で、「如何に一芸一能に秀でようとも、人として五常を辯えねば、地獄に墮ちる外はない」などと、よく仰有ったものでございます。所がその後一月ばかり経って、愈々地獄変の屏風が出来上りますと(中略)屏風の画を一目御覧になりますと(中略)それまでは苦い顔をなさりながら、良秀の方をじろじろ睨めつけていらしたのが、思わず知らず膝を打って、「出かし居った」と仰有いました¹³⁾。

(『地獄変』、pp.194-195)

引用を長くしたのはほかでもない。良秀に対する他者の態度がよく表れているからである。良秀は大殿地獄に苦しんでいる最愛の娘を救うためには、死を以って救うことしかないことに気づき、苦悩に満ちた腹案を以って大殿に願ひ出る。それは娘を地獄変図のモデルとして焼き殺すことであった¹⁴⁾。ところが、他者は良秀の苦悩に満ちた心境を知らず、「人面獣心の曲者」とか「地獄に墮ちる外はない」と論っていた。なお、「横川の僧都様」という仏道に精進する僧侶でさえも良秀を罵ったり、描き上がった地獄変図を見てからは「出かし居った」と褒めたりするのである¹⁵⁾。こういう他者の態度は内蔵助の場合と同様である。彼が吉良家を欺くために「苦肉の計」として狂人のふりをし、「濫行」を振る舞った頃は、京都では彼を「大石かるくて張抜石」と罵ったのである。だが、「復讐の拳」が成し遂げられた際には、内蔵助の「濫行」を「伴狂苦肉の計」と褒めたり「大慶の至り」と評価したのである。こういう他者の態度は「背盟の徒」にもよく表れている。「復讐の拳」が成功すると、武士のみならず町人百姓にまで「復讐の拳」を「犬侍の祿盗人」や「人畜生」と罵って「殺しても飽き足らない」と「罵殺」したと云う。このような世間の非難に耐えず、「復讐の拳」の中の岡林奎之助などは詰腹を切られざるをえなかったと云うのである。また、詰腹をしないうでいた「背盟の徒」に対する世間の態度は次のようにある。

13) 『芥川龍之介全集』ちくま文庫(2011)に拠る。

14) 良秀が娘を焼き殺すことは金熙熙(2005)「芥川の芸術至上主義考察」『日本文化研究第15輯』東アジアで日本学会ですでに詳しく述べた。なお、これに関して小野隆(1991)は「娘を地獄変図のモデルという口実のもとに焼き殺しの苦痛は与えるが、大殿への終局的の拒絶を生かさせる」といい、地獄変の屏風について「良秀は父なればこそ見ることができた娘の地獄を描いたのである」と指摘している。pp.53-59

15) 前出小野論文に「世間が倫理的にどう評価しようと、その世間の代表とまでいいうる横川の僧都までもが「出かし居った」といわざるを得ない作品になる。」という指摘がある。p.58

仇討の真似事を致すほど、義に勇みやすい江戸の事と申し、且はかねがね御一同の御憤りもある事と申し、さような輩を斬ってすてるものが出ないとも、限りません。

(『或日の大石内蔵之助』、p.18)

世間は「背盟の徒」を斬りかねないという陰悪な空気が漂っている。「背盟の徒」は背盟をせざるをえなかった、それなりの事情があったのであろうが、他者は彼らと何の関係もないのに、何となく彼らに反感を抱き、詰腹を仕向けるのである。「背盟の徒」は背盟したそのことだけでも汚名を受けたわけであるが、さらに詰腹を仕向けられる不幸な境遇に駆られることになったのである。つまり、世間の他者は詰腹をしない「背盟の徒」をそのままには置かないのである。他者は彼らが安穩に生き残っていることを許さないのである。作者芥川はこういう他者の態度、心理について『鼻』で次のようにいっている。

一人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこっちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥おとし入れて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。

(『鼻』、p.72)

芥川は上記のように、人に敵意を抱き、その人を不幸に陥れようとする人間の心理を「傍観者の利己主義」といっている¹⁶⁾。他者である世間は「背盟の徒」をそのままにして置かなくて、彼らをもう一度不幸に陥れようとする。なお、それに止まらず彼らに「敵意」を抱き、詰腹を仕向けたのである。このようにして犠牲になったのが岡林奎之助だったのである。言い換えれば、彼は他者である「傍観者の利己主義」の餌食になったわけである。作者芥川は「背盟の徒」を以って「傍観者の利己主義」を鋭く指摘しているのである。

7. 人間本来のエゴイズムのこと

内蔵助は最初は「背盟の徒」に対して「遺憾」に思い「不快」を覚えていた。が、「復習の拳」

16) <傍観者の利己主義>についてはすでに金熙照(2004)「鼻論」『韓国日本語文学』第22輯、韓国日本語文学会で詳しく述べた。

が成し遂げられた今では、彼等の背盟に対して別に恨みを持ってない。背盟を「遺憾」とか「不快」とか思わないで、むしろ自然の成り行きとして思っていたのである。それゆえ、内蔵助は「背盟の徒」に対しても「我々と彼等との差は、存外大きなものではない」と思っていたのである。

彼は彼等に対しても、終始寛容の態度を改めなかった。まして、復讐の事の成った今になって見れば、彼等に与う可きものは、ただ憫笑が残っているだけである。

(『或日の大石内蔵之助』、p.19)

内蔵助は「背盟の徒」の「変心」を自然の成り行きとあって、今や彼らに対して憐憫の情さえ抱いている。すなわち、同盟と背盟という離合集散は人情の常であり、「背盟の徒」の「変心」を咎めるべきものではないということである。作者芥川は「人情の向背」や「世故の転変」というものは、人間本来のエゴイズムから生ずるものなので、それはどうしようもないことだといっているのである。なお、先に述べたように、内蔵助は「放埒の生活」の中に、「復讐の拳を全然忘却した駑蕩たる瞬間を、味わった」と告白していた。これも言い換えれば、彼が「忠義」よりも「駑蕩たる瞬間」を楽しんだ、人間本来のエゴイズムに動かされた、どうしようもない所為だったのである。

8. おわりに

内蔵助は本懐を遂げて、久しぶりに味わっていた長閑な春の満足した心持ちは、自分の「放埒の生活」を「激賞」され、もうなくなってしまったと云う。

あとに残っているのは、一切の誤解に対する反感と、その誤解を予想しなかった彼自身の愚に対する反感とが、うすら寒く影をひろげているばかりである。彼の復讐の拳も、彼の同志も、最後にまた彼自身も、多分このまま、勝手な賞讃の声と共に、後代まで伝えられる事であろう。—こう云う不快な事実と向いあいながら(中略)情なさそうにため息をした。

(『或日の大石内蔵之助』)

今此の時、内蔵助に残っているのは「情なさ」と「溜息」ばかりである。彼は物事の真実を知らずに、むやみに上辺ばかりを以て勝手にあげつらう世間と他者に失望し、溜息をつい

ている。すなわち、彼は「傍観者の利己主義」や人間の独善的なエゴイズムにどうしようもなく「溜息」をついているのである。彼のこの溜息は「情なさ」を伴い、彼を「云いようのない寂しさ」に至らせている。「この云いようのない寂しさ」は他でもなく、「彼の復讐の挙も、彼の同志も、最後にまた彼自身も、多分このまま、勝手な賞讃の声と共に、後代まで伝えられる事であろう」という他者のエゴイズムから来るものである。芥川は人間のエゴイズムに翻弄されながらも、そこから自由でない人間本然の姿に失望し、その心境を「云いようのない寂しさ」を以って吐露しているのである。

【参考文献】

- 中村友(2000)「或日の大石内蔵之助」『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版、p.38
 三好行雄(1967)「或日の大石内蔵之助」『芥川龍之介論』筑摩書房、p.259
 佐藤泰正(1978)「或日の大石内蔵之助」『芥川龍之介必携』学灯社、p.90
 吉村穉(1974)「大石内蔵之助－初期世界の変質とその展開性」『芥川文芸の世界』明治書院、p.65
 菊地明(2002)「急使走る」『忠臣蔵』ナツメ社、p.66
 小野隆(1991)「地獄変」『専修国文第四八号』専修大学国語国文学会、pp.53-59
 「或日の大石内蔵助」『芥川龍之介全集』2、ちくま文庫(2011)
 「藪の中」『芥川龍之介全集』4、ちくま文庫(2005)
 「鼻」『芥川龍之介全集』1、ちくま文庫(2011)
 「地獄変」『芥川龍之介』、ちくま文庫(2011)

논문투고일 : 2016년 09월 20일
 심사개시일 : 2016년 10월 18일
 1차 수정일 : 2016년 11월 16일
 2차 수정일 : 2016년 11월 17일
 게재확정일 : 2016년 11월 20일

 <要旨>

『或日の大石内蔵助』論

- エゴイズムのことについて -

金熙照

本作品は大正6年に発表された芥川龍之介の短編である。芥川は江戸幕府時代の赤穂事件を取材し、その事件の中心人物であった大石内蔵助を主人公にして彼の内面の世界を発いたのである。内蔵助が細川越中守綱利の屋敷に預けられていた、ある春の一時、仲間たちと談笑のうち彼自身だけが感じていた<云いようのない寂しさ>を繊細に描きあげている。その<云いようのない寂しさ>は<彼の復讐の挙も、彼の同志も、最後にまた彼自身も、多分このまま、勝手な賞讃の声と共に、後代まで伝えられる事であろう>という内蔵助の真の心境を知らない他者のエゴイズムから来るものである。芥川は人間のエゴイズムに翻弄されながらも、そこから自由でない人間本然の姿に失望し、その心境を<云いようのない寂しさ>を以て吐露しているのである。

A study on “Ouisikuranosuke in a day” by AkutagawaRyunosuke

Kim, Hee-Jo

This work is a short story published by AkutagawaRyunosuke in 1917. Akutagawa describes Ouisikuranosuke's inner world, who is the main character in the story and central figure in the affair, against the backdrop of Ako incident happened in the Edo era. Kuranosuke is captivated by inexpressible desolation during talking with his partisans involved in the affair. That is from that unborn generation will talk about him and his partisans as well as his avenging his master. In other words, his desolation is from people's egoism who don't know his feeling. Akutagawa disappoints man's innate phase that man is fooled with and cannot free from egoism and then delivers the feeling as inexpressible desolation.